

関西農業史研究会報

No.10 1980・2・2

1979.1.20の第14回例会で、従来の「近世農書を読む会」から「関西農業史研究会」に発展・改称してから、1年がたちました。研究会も回を重ね、第14～24回まで11回の研究会を行いました。以下のとおりです。

- | | | | |
|-----------|-------|--------------------------|-------|
| (14)1-20 | 堀尾尚志氏 | 「近世農書の中の農具」 | (8名) |
| (15)2-3 | 飯沼二郎氏 | 「朝鮮総督府の農業技術政策」 | (6名) |
| (16)3-17 | 今井敏行氏 | 「明治期農村計画の事例とその技術的意義について」 | (9名) |
| (17)4-21 | 徳永光俊 | 書評三橋時雄『日本農業経営史の研究』 | (11名) |
| | その後 | 出版祝賀会(あつか飯店にて) | (9名) |
| (18)5-12 | 田中耕司氏 | 「ビルマにおける乾季稲作の諸相」 | (8名) |
| (19)6-9 | 内田和義氏 | 「近世中後期北関東における一農民の思想」 | (8名) |
| (20)7-27 | 中田謹介氏 | 「農稼業事と天蔵永常」 | (13名) |
| (21)9-8 | | 「中国南部農業報告会」 | (15名) |
| (22)10-6 | 岡 光夫氏 | 「百姓伝記について—著者像と現代的意義—」 | (8名) |
| (23)11-10 | 植村泰夫氏 | 「シヤフにおける共同占有をめぐって」 | (5名) |
| (24)12-14 | 徳永光俊 | 「親民鑑月集と近世南伊予の農業」 | (5名) |

また、合報も No.1(第13回の三好報告), No.2(第15回の飯沼報告), No.3(第16回の今井報告), No.4(第17回の徳永報告), No.5(第18回の田中報告),

No.6(オ19回の内田報告), No.7(オ20回の中田報告), No.8(オ21回の中国訪問記), No.9(オ22回の岡報告). そして本号のNo.10(オ24回の徳永報告)と、10回発行する事ができました。

今後も研究会を発展・充実させるためには、会員の皆様のご協力をお願いする次第です。

オ24回例会 1979.12.14 徳永光俊『親民鑑月集』と近世伊予の農業

(1)『親民鑑月集』の歴史的 성격

その歴史的背景は、永禄七年前後の戦国末期のものとして描かれている。土居水世は、宗案を領主清良と同じ立場の者として描いており、『親民鑑月集』の基本的性格は、戦国に生じる在地領主清良の勸農策・役人論を記したものである。そして勸農の対象も、下人帝働を使用する中世的な農業経営である。このような点で、『親民鑑月集』は中世的色彩がほどこられている。

しかし、その勸農策の具体的内容としての勸戒思想には、近世の儒教道徳と類似のものがある。また、宗案の勧める農業技術の具体的内容は、次に述べるように戦国末期というよりも近世初期の技術内容を持っているのである。この点では近世的といってもよいのである。私が強調したいことは、この文脈なのである。『清良記』は、土居清良や松浦宗案によってではなく、土居水世に

よって、十七世紀前半に書かれたという意味は、ここにあるのである。

(2) 『親民鑑冊集』の農業技術

『親民鑑冊集』では上農下農の差異が強調されている。下農というのは近世初期段階に対応する地力・肥力を維持しえておらず、より低い集約度水準にあったといえよう。地力を養うことなく肥力を急にふやしても、少肥性品種のため、徒長や倒伏といった現象をおこしてしまうのである。このように上農下農、畿内の作物についての記述から、当時の農業生産力の発展方向が、多肥化、集約化、それに対応する耐肥性品種の採用にあったことがわかる。

どちらかといえば、労働手段にかかわる技術よりも、作物や肥料といった労働対象にかかわる技術面において飛躍が見られたといえよう。十分な乾田化を実現しえず、有機質肥料の施用も地力を高めるよりも肥力としての効果が大きかったことなどのために、総合的な豊沃度（広義の地力）を高めることがあつた。従って、多肥集約化といっても肥界を拜にさるゝえなかつた。

十七世紀後半以降、幕府や藩の大規模な土木水利工事による水利の改善・土地改良、鋤を中心とした農具の改良、分化等の労働手段にかかわる技術が飛躍的に発展し、それに中世以来の労働対象的技術（とりわけ魚肥や粕類の速効性肥料の普及）が加わった、そして、小農自立政策で労働集約的な肥培管理を可能とさせる家族常作経営が確立していくことによつて、生産力段階は中世段階

から近世段階へと発展するのである。

『親民鑑月集』は、南伊予における手工にその移行期の技術とあらわしているのである。中下農は中世段階であり、上農が近世段階の初期形態といえるだろう。

(3) 『親民鑑月集』の稲作技術

従来は、早稲の項に書かれている早稲一蕎麦・小畑・小菜一早麦の記述をとらえて、中世を通じてこのような高度な作付体系が確立していたことが強調されている。確かに高度な作付体系が存在したことは、一つの技術発展として評価できる。しかし、それが当時の農業生産にとってどれだけ積極的な意味を持っていたかは、疑問である。私は、当時の多肥集約化段階では、このような高度な作付体系を高反収で安定的に維持していく事は不可能であったと考える。

農民の毎日の生産や生活の関心は、高度な作付体系、乾田二毛作等にあつたのではなく、当時の多肥集約化段階に対応した晩稲化により、より高反収で安定した収穫を得られる湿田一毛作技術にあつたのである。

しかし、中世を通じて二毛作が徐々にではあつても普及したことは歴史的事実であり、それを無視しようというのではない。私が主張したのは、高反収で安定した乾田二毛作技術が花開くためには、稲作技術が湿田一毛作技術として体系化される必要があるのであり、中世における乾田二毛作が、単に量的にふえて近世段階になるのではないということである。(徳永 記) (金沢米作選んでしお、申込利おん)